



奥に見えるのがモンバサ港の既存のターミナルで、手前が建設中の新ターミナル。今後さらに拡張する計画だ（提供：東洋建設株式会社）

**港の機能強化で
ビジネスチャンス呼び込む**

しかし、港が拡張されたとしても、スムーズに作業を進めることができないければ、船の渋滞は完全には解消されない。新ターミナルをいかに効率よく運営するか。日本の事例を参考にすべく、7月上旬、KPA幹部4人が来日した。

一行が向かった先は、日本5大港の一つ、神戸港。「大輪田泊」と呼ばれた平安時代から近隣国と貿易を始め、明治時代に入ってから海外との貿易の促進を目指して規模を拡大。世界有数の国際貿易港に発展し、現在のコンテナ取扱量は約250万TEUに上る。

神戸港のターミナルでは、ちょうどコンテナ船の積み下ろし作業が行われていた。クレーンがコンテナを持ち上げ、トレーラーの荷台に載せ、トレーラーが集積場まで運ぶ。降ろしたら、再びクレーンのもとに戻っていく。1船につき約5台のトレーラーがこれを

**沖まで続く
船の渋滞**

港に接岸する巨大なコンテナ船。岸壁には約50メートルの高さのクレーンがそびえ立ち、コンテナを一つ一つ持ち上げては、下ろしていく。

ケニア東部、インド洋に面したモンバサ港。東アフリカ最大の国際貿易港で、近隣の内陸国ウガンダ、南スーダン、コンゴ民主共和国、ルワンダなどへとつながる重要な玄関口になっている。「東アフリカ諸国は物資や原料を輸入に頼っているため、この地域に暮ら



神戸港のオペレーションセンターを視察し、「モンバサ港と同じコンテナ運用のシステムを使っているので参考になりました」と話すKPAのムワムレさん

約1億5000万人にとって重要な港です」と、モンバサ港を管理するケニア港湾公社（KPA）のフランシス・ギチリ・ンドゥア総裁は話す。

絶え間なく続く、コンテナの積み下ろし作業。ところが、ふと沖に目を移すと、数隻のコンテナ船が並んでいる。港が他の船で埋まっているため、数日間、渋滞待ちをしているのだ。

近年、東アフリカ諸国の経済成長により、モンバサ港の貨物取扱量は急増している。現在の貨物取扱能力は年間約90万TEUだが、実際に入ってくる量はそれを上回り、まさにパンク状態。このままでは物流がストップしてしまい、経済成長のチャンスをつぶしてしまうことになる。

繰り返す。「クレーンの動きを止めることなくトレーラーが循環して、まったく無駄がない。とても効率的です」と、KPA一般貨物ターミナル責任者のイブリン・ウマズイ・ムワムレさんは感心していた。

こうした地上での作業を支えているのが、ターミナルの司令塔であるオペレーションセンターだ。中には数台のパソコンが並び、画面にはターミナルの全体図が映し出されている。ここでコンテナの動きを管理し、出荷先別に分け、船に積み込む際には重いコンテナが下にくるよう操作している。KPA幹部たちは、食い入るよう画面を見つめていた。

続いて、ターミナルに併設されている倉庫へ移動。ターミナルに上がった貨物のうち、雑貨類を一般倉庫に、食品類を冷蔵倉庫に一時保管し、通関や検疫の手続き後、出荷している。一方のモンバサ港では、港から数キロ離れた場所に倉庫があるため、こうもスムーズには出荷できていない。「港の中に倉庫があると、輸送の費用や時間を抑えることができます」と、神戸港の運営に携わる中野宏明さん。KPA幹部たちはその話を耳を傾けながら、モンバサ港の未来の姿を思い描いていた。

新ターミナルが整備され、コンテナの取扱量が増えれば、次なる



神戸港のターミナルに併設される倉庫を見学するKPAのンドゥア総裁（左）たち。作業の効率化のため、港で荷物を梱包して出荷している

そこで明治時代からいくつもの国際貿易港を運営してきた経験を持つ日本の協力の下、2007年に一大プロジェクトが動き出した。モンバサ港の拡張工事だ。既存のコンテナターミナルの隣に新ターミナルを建設し、貨物取扱能力を年間約58万TEU増やすというもの。2016年2月の完成を目指し、工事が進められている。

目標は、企業活動の活性化だ。KPA幹部たちは日本企業のアフリカ進出を促すため、東京でセミナーに臨んだ。集まったのは、物流会社や商社などから100人以上。モンバサ港の工事の進捗を報告した他、今後さらに港を拡張し、港と市街地を結ぶ道路の整備や、企業誘致のための経済特区の新設などを進めていくと説明した。「モンバサ港で拡大し続けるビジネスチャンスをアピールできたと思う。日本企業も大きな関心を示してくれました」とンドゥア総裁は胸を張る。

港の整備を通じて経済を活性化し、人々の生活を豊かにする。ケニアと日本は1つの目標に向かって、より一層、絆を深めている。

成長を続ける海の玄関口

東アフリカの貿易拠点、ケニアのモンバサ港。
年々増え続ける貨物量に対応すべく、
ケニアの行政官たちが港湾運営のノウハウを学びに日本を訪れた。

ケニア
from Kenya



神戸港のターミナル。阪神・淡路大震災後も異例のスピードでオペレーションを回復させた



※20フィートコンテナを1として、港の貨物取扱量を表す単位。



KPA幹部らがプレゼンした東京でのセミナー。会場はアフリカ進出を狙う日本企業で埋まり、関心の高さがうかがえた